未来の鍛金界を担う

東京荒川区にある長澤製作所。ここで家庭用の茶器を中心に鍛金製品を製造している。カンカンカン、カンカンカン。木槌が銅板をたたく音が部屋中に響き渡る。リズミカルで勢いがよく、響く金属音が体に伝わり心地いい。

職人と聞き、思い浮かべるイメージはどのようなものだろうか。長澤製作所に若き女性職人がいると聞き、話をうかがった。

彼女は鈴木瑞穂氏。三代目となる長澤利久氏のもとで働き始め、現在三年目になる。伝統工芸品の後継者を育てるプロジェクトに参加し、職人の道に進むこととなった。

まずは道具を磨くことから始め、すぐに長澤製作所の主な製品となる急須胴体部の製作にとりかかった。利久氏に細かく確認してもらいながら、練習を積み重ねる。「彼女はベースがしっかりしていて、応用力がある」と利久氏は言う。瑞穂氏は高校時代に金属工芸を学んでおり、鍛金、鋳金、彫金の経験があった。その経験を生かし、今では茶筒、急須などだいたいの作品を一人で作り上げるという。彼女がデザインするビアマグはとても人気があり、百貨店などに多数出品している。繊細な打ち出し模様はマグに独特の陰影を与え、見る人の心をつかんで離さない。「使う頻度が多いものが道具として優れているのではないかと思う。みんなが日常的に使うものを作る職人になりたい」と冷静に語る瑞穂氏の全身から、ものづくりにかける熱い情熱がひしひしと感じられる。未来の鍛金界を担う、若き女性職人から目が離せない。

鈴木 瑞穂氏

光り輝く銅の昆虫たち

まるで今にも動き出しそうな、躍動感あふれる昆虫たち。これをわずか0・二㎜の銅板をたたき、作り出すというから驚きだ。この作品の制作者、谷口宜伸氏に話をうかがった。

本業は建築板金業で、全国板金技能競技大会で優勝するほどの腕前である。練習を進める過程で、銅の素材の面白さに触れ、銅を使い「人がぎゃっと驚く躍動感溢れるものを作りたい！」と思い立った。

まず、展開図を作り、切ったものを金づちでたたいていく。カブトムシやクワガタを作る際には曲面が必要なため、鍛金に独自の工夫を施し作り上げる。同氏は自分の頭の中で展開図を組み立てていくそうだ。何度も練習を積み重ねるうちに、頭で考えた展開図どおりにたたけば立体的な昆虫が作れるようになり、今ではなんと六十パーツを要する、ケラやカマドウマも作れるようになった。薄い銅板から作り出す美しい作品の数々はまさに匠の技である。しかしこれは同氏の「もっと良いものを作りたい」という探求心と努力の賜物だ。

谷口 宜伸氏